

～目の前のことを淡々とやり、受け止めていく柔らかさ～

浅原 聡子 さん

まだ日本ではなじみの薄い「グリーフケア」という言葉をまずは知ってほしい。ここから、お話は始まった。



グリーフというのは、辞書を紐解くと「深い悲しみ、悲嘆、苦悩などを意味する」とある。

つまりグリーフケアとは、身近な人を失ったこと、そして人間関係の別れや失業など大切なものを喪失した際に感じる様々な感情に寄り添っていく、ということだ。

さらに浅原さんは淡々と、しかし奥底にある深い想いをもって語る。

「悲しみのケアと言われるけれど、悲しいだけでなく、怒りや責める気持ち、そして時にはホッとする思い、そして罪悪感など。様々な感情がそこにはあるんです」

「そこにある反応は、悲しみだけでは足りないのです」と。

■ 看護師としての歩み ■

幼い頃、自分には得意なものが何もないと感じ、

「これは大人になったら困るんじゃないか」

「上手にできることは何もないけれど、五体満足だし、だったら何かしなくちゃ」と思って、看護師という道を選択する。

看護師となってからは小児専門の病院で働き、やりがいのある仕事だと感じていたそう。

「他の人も「人はみんなやりたい職業をやっているんだ」ということを信じて疑ったこともないくらい、自分のやりたいことをやっているという実感を持っていたんですよ」と少し笑いながらお話された浅原さん。

しかしそこで、まだ幼い子が病となり、時に若い命がなくなっていくのを目の

当たり前にして、当初不条理な現実や憤り、苦しさも感じていたのだという。そんな中、浅原さんは「グリーフケア」という言葉に出会う。

■ 生きている人誰にも必要です ■

そして、浅原さんはグリーフケアを「大事だから」という感覚のもと、始める。大切なものや人をなくして様々な気持ちを抱えている人、誰にどう話していいかもわからない人、そして予期悲嘆といって「なくしてしまうかもしれない」という不安・心配・悲しみを感じている人。

そんな人の想いに寄り添い、一緒に泣いたり怒ったり笑ったり、時に叱咤激励している。



大切なもの、人をなくすということは、生きている以上どこかで通る道だ。

だからグリーフケアは「生きている人誰にも必要なのです」と言われる浅原さんの言葉は、すーっと心の中に入ってきた。

今はそういった感情の渦の中になくても、その時には一緒に見てくれる人がいる、話ができる人がいる。という、その存在を知っているだけで、少しでも気持ちがふわっと軽くなる、少し安心する想いを持つ人は多いのではないだろうか。

■ つないでいくこと ■

浅原さんの中で「グリーフケア」の大きな柱は、

『いのち、そして愛情をつないでいくこと』

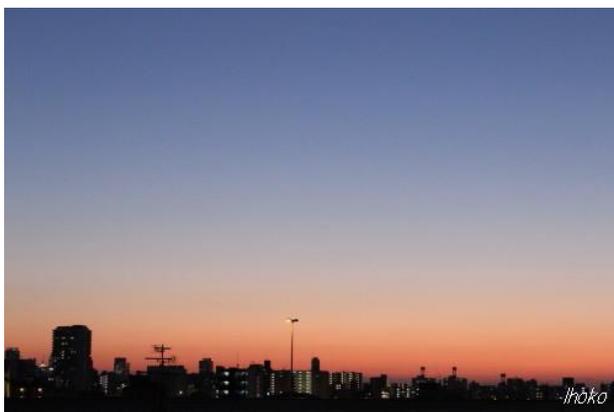
先に生きていた人たちのいのちも、これからの子も、これからの人も、そして自分自身も「いのちを、愛情をつないでいく」こと。

いのちや、大切なものとともにあった愛情をつないでいくこと。

大切な人、大切なもの、大切なこと。それらのことを「つないでいく」。

有限の中で生きている人が、私たちが「つないでいく」。
そしてまた次につながっていく。
そうして社会で少しずつ分かち合っていく。
その先に何があるのか今はよく分からないけれど、一緒に想いや感情、そしてこの先に視線を向けることはできる。
そして、ふと横を見たらそこにいてくれる。
そんなふっと息をつける場が、浅原さんが作り出す場所なのだと思う。

浅原さんの会社の名前は「ivy」。
「あとから知ったんですけど、アイビーの葉言葉には「永遠の愛」というのがあったんですよ」
と笑顔で話されていた浅原さん。
なんとぴったりな！！
心の底に流れていた大事なものが、時を経て名前にまで集約されていたのだ。



3年以上、毎日書き続けられている
ブログでも日々の想いが綴られて
いる。

浅原さんは、想いや出来事、感覚に
色を付ける人。
まるで水彩画のように、透明感のある
淡い色を付けていく。
そこには安心感と清らかさがあり、

文章を読んでいると少しずつ気持ちが緩やかになっていくのを感じた。
淡々とやわらかく、そっとそこにいてくれる。
そんな淡い光を持った人だ。

コトノライター いのうえ いほこ